

第2章 心理学の理論を用いた「慣れ」の除去

消防活動における訓練は、反復訓練が基本である。反復訓練を行うことにより、習熟し、正確にかつ迅速に行動することが可能となる。

ところが、繰り返すことによる技術習熟の反面、慣れにより基本的な動作を省略してしまうという面もみられることとなることから、安全管理の面からは、潜在的な事故のリスクを高めることとなり、反復訓練を実施することによりかえって危険な状態を生み出すことにつながることもある。

こうした、「慣れ」や慣れに伴う「飽き」が発生する原因や、それを解消するための手法について心理学の理論による分析を行い、後述する消防関係者としての対策の検討につなげていくこととする。

1 教育訓練への「慣れ」の除去

これまでもさまざまな教育訓練法が開発されているが、効果性が高く利用頻度の高いものほどマンネリ化も指摘されている。こうした訓練そのものに対する「慣れ」と、その結果生じる「飽き」は、その訓練がもっている教育効果を著しく妨げるものである。

そこで以下に、「慣れ」や「飽き」をなくし、教育訓練の本来の効果を高めるための方法を検討する。

(1) 学習理論の視点から

どのような刺激でも繰り返し経験することは、その新奇性を失うことになる。このようなプロセスを「馴化^{しゅんか}」と呼ぶ。教育訓練への慣れは、この馴化のプロセスと考えられる。

馴化は本来、環境への適応であり、生活体の生存を保障するものである。そのため、これを完全に除去することは困難である。しかし、いくつかの方法を用いることで馴化の速度を遅らせることは可能である。

馴化の特徴としては以下のものがある。

刺激の呈示頻度が多くなるほど馴化は速く進む。

刺激の強度が強いほど馴化は遅くなる。

刺激が長時間与えられないと、その刺激に対する反応は自然に回復する。

馴化が生じたとしても、それと異なる他の刺激が与えられると、新たな刺激に対する注視反応などの行動が再び喚起される。

これらのことから、馴化を生じさせないためには、同一の刺激を繰り返すことなく、かつ頻繁に与えないこと、また、新奇な刺激を与えることが効果的である。

ただし、新奇な刺激は我々の行動を左右する多くの強化子(注¹⁰)の中のひとつにす

(注¹⁰) 行動のあとに起こる環境変化のうち、その後の行動の出現頻度を増加させるはたらきをもつもの。報